

現代短歌分類辭典

第四十六卷

津 端 修 編 纂

津 端 修 編 纂

現代短歌分類辞典

第四十六卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

現代短歌分類辞典

46

昭和五十三年八月一日発行 定価一、六〇〇円

著者発行
兼印刷者
津 端 修

東京都中野区上高田二丁目九の一六

発行所
津 端 修

〒164

振替 東京 六七三四一番
電話 三八七局八四二九番

(第四十六卷)

五	一	二	一	一	一四	一七六	一	一七	三四	二二	一六	一	五
一九〇	"	"	"	一八九	一八八	"	一七四	一七二	一六九	一六六	"	一六七	一六六

有明の湯

一九〇

ありあらーぬ

一

一〇四

有明の灣

〃

ありあり

一九

一〇五

有明の村

一九一

ありありーし

二

一〇七

ありあけやま

〃

ありありーて

四〇

〃

あり合はしーたる

〃

ありありと

三〇

二〇二

有り合す

〃

ありありとーしーて

二

二九

ありあはせ

〃

ありありーの

一

三〇

ありーあへーなくーも

一九三

ありある

三

〃

ありーあへーぬ

〃

あり生きーて

一

三三

ありあへーる

〃

ありう

一

〃

ありあまりーたる

〃

あり憂かりーけむ

二

〃

ありあまる

〃

あり憂さ

三

〃

同

二三

一九三

亜硫酸瓦斯

四

三三

ありあまるーかに

一九四

アリウシヤン

三

〃

ありあまるーてふ

〃

あり得ーべき

三

〃

ありあまるーらし

〃

ありうーべくーして

一

三三

ありあらーずーや

〃

あり得ーべし

一

三四

あり得る	九	三三	あり得ゝむ	三	三三
あり得ゝざりゝけむ	一	三五	同	一	三三
あり得ゝざる	四	〃	あり得ゝむゝや	一	〃
あり得ゝし	九	〃	ありえゝめ	一	〃
あり得ゝしゝや	一	三六	あり得ゝんゝぞ	一	三三
あり得ゝず	四	〃	ありえゝんゝや	一	〃
あり得ゝたらゝう	一	三七	在処	三九	〃
あり得ゝたる	一	〃	蟻ヶ崎	二	三六
あり得ゝて	一	〃	在り方	一五	三七
あり得ゝで	一	〃	ありがた	七	三八
あり得ゝない	二	〃	形象(ありがた)	二	三九
同	三	三八	ありがたい(終止形)	二	〃
あり得ゝなゝば	一	〃	同 (連体形)	二	〃
あり得ゝぬ	一六	〃	ありがたう	七	〃
ありえゝぬゝべき	一	三〇	ありがたからゝぬ	一	四〇
あり得ゝば	一	三三	有難かりゝし	二	〃
あり得ゝむ	一	〃	有難がりゝて	一	四二

ありがたかりーぬ
 有難がる
 ありがたき
 ありがたきーごとし
 ありがたきーぞーも
 有難く
 有難くーして
 有難くーて
 ありがたけれーど
 有難さ
 有難し①
 同②
 同③
 同④
 同⑤
 在りがたし
 有難し

一 三 一五 一 一 四 五 二 一 二 九 二 八 二 二 二 七 四

二四 二 二 二五 二五 二 二五 二六 二五 二 二 二 二 二 二 二 二 二

ありがたしーと
 ありがたしーとて
 ありがたしーや
 ありがたみ(形容詞)
 有難味(名詞)
 ありがたみーすーも
 ありがたみーせーし
 ありがたーや
 ありがちの
 在りーがてーなくーに
 在りーがてーに
 ありーがてーにーけり
 在りーがてーぬ
 ありーがてーぬーべし
 ありーがてーぬれーば
 ありーがてーの
 ありーがてーましーも

三 三 一 一 二 一 一 一 一 一 二 一 四 二 二 二 一 一

二六 二 二九 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二

有りかねる
 ありかねーじ
 ありかねーつ
 在りかねーて
 蟻川嶽
 在り甲斐
 ありーかーへぬーらむ
 あり顔
 ありがほしき
 ありかーむ
 有賀康人
 在り通はーむーぞ
 ありがよひ
 有り通ふ
 ありかよふーたり
 在り通ふーらし
 あり涸く

一 一 一 八 四 一 一 一 二 一 一 九 一 七 一 一 一

〃 〃 三三 〃 三二 〃 〃 〃 〃 三〇 〃 三九 〃 〃 三六 同 三七

ありきたり (名詞)
 歩きーし
 ありきーし
 歩きーけり
 ありききーて
 ありき (動詞)
 ありき (歩き)
 同 ⑨
 同 ⑧
 同 ⑦
 同 ⑥
 同 ⑤
 同 ④
 同 ③
 同 ②
 同 ①
 ありーき
 有りーかーわぶーらむ

一 三 一 一 一 二 八 二 二 六 二 五 一六 一六 三〇 六 一

〃 三六 〃 〃 〃 三五 〃 三四 三三 三二 三〇 三五 三二 三〇 〃 二八 二八

あり来り	一	三六	歩きみる(連体形)	一	三四三
歩きーつつ	五	〃	同(終止形)	一	〃
歩きーて	二	三七	歩く(終止形)	三六	〃
ありきーてふ	一	〃	同(連体形)	二九	三四六
ありきーてーまし	一	〃	ありく	一	三四九
ありきーと	二四	〃	歩くーなり	一	〃
ありきーとーぞ	一	三九	ありくーなりーけり	一	〃
ありきーとふ	一	四〇	ありくーも	一	〃
ありきーとも	一	〃	ありぐるし	一	三五〇
ありきーとーよ	二	〃	ありぐるしさ	一	〃
ありきーなど	一	〃	歩けーど	一	〃
ありきーぬ	一	〃	ありげなけれーど	一	〃
ありぎぬの	一	四二	ありげなり	一	〃
ありきーの	二	〃	ありけーば	一	三五三
ありきーや	一六	〃	ありけむ(終止形)	五	〃
歩き呼びーつつ	一	四三	同(連体形)	五	三五六
歩きゐーて	一	四三	合計	四〇六一	

あり④【動詞】

眼鏡して夫の澄みたるまなざしあり静かに吾をやしなひくれき

扇畑利枝

芽ぐむ枝にいささか黒きしめりありけさの朝日はあたたかく染め①

高木一夫

メスのもとひらかれてゆく過去がありわが胎児らは闇に蹴り合ふ①

中城ふみ子

目路遠くおぼろに見ゆる島のあり点滅するは灯台の灯か⑨

岡野直七郎

目路の限り葉を振ひたる柳ありへうへうとして真北風なるかな⑤

田中民子

眼路はるかにあかるき陽ざしみちてあり打ち敷く大野のその浅みどり④

生田蝶介

めでたくも箱根の夜半の空にあり梅花の星と白蘭の星②⑧

與謝野晶子

眼とづれば睨にはふ日ざしあり吾等の歩みとどまらざらむ⑦

松田常憲

目閉づれば睨に触るものあり命のごとくあたたかきもの②⑤

吉井勇

眼に沁みて冬木の枝を吹く風ありこのあけくれを命つかれし④

吉田垂穂

目に見えぬみ魂の誘ふえにしあり嬉しや君とあふ日うららか⑥

柳原白蓮

あり

あり

目の下の磧右岸に林あり或る時は雨降り或る時は没陽射す②

眼のふかく昼も臆する男あり光れる秋をぢっと凝視むる①

目の前に響りて止まざる鐘があり響り終るまで聞かねばならず③

眼をあげて今日見る我の上にあり美しきかも初夏の昼空⑬

目をとぢてつくづく思ふをりもあり夢のごとくにすぎし昔を②

面前にて手錠かけられし男あり相不敵なれば救はれたりき②

黙阿弥の暗き世界にわれもあり悲しいかなや人のいのちは⑪

木筒に古代墨色生きてあり請縄参拾了・付御馬并夜行馬と記す④

黙としてあれば絶えざるなげきありされどいはむに徒為はかなしき②

木蓮の木の細き枝にたるみあり花をたちて皆空をさす①

もくれんの花も清水につけてあり売らるるところでんと並びて⑭

文字盤に針光りつつ時計あり痛々しなべてすべなき「生」か⑦

宮 終二

北 原 白 秋

斎 藤 史

窪 田 空 穂

明 治 天 皇

横 田 専 一

吉 井 勇

初 井 し づ 枝

松 村 英 一

竹 尾 忠 吉

野 寄 惣 寿

宮 終二

望の月観むと川舟にわれら在りゆるく棹さし時を過ぐして⑤

吉野秀雄

求めつつ励みつつやまず友らはあり杳かなるゆきに友のことおもふ②

遠山光栄

物言はぬ背子には深き憂ありわがまごころにひびかざらめや④

今井邦子

もの言へばぢかに触れくるかなしみあり月夜は匂ふ白藤の花⑥

小見出和夫

物書けとわれに勧むる人のあり書けばたのしき湧きて書きつぐ②②

窪田空穂

藻の蔭より躍り出でたる一尾あり雨季の石榴の花より朱し②

渡辺信子

もの食ひつつ下向きに来る少女あり街上にして言を問はむか④

斎藤茂吉

もの干竿にシートあまたはしてあり昼の光はまぶしくてならぬ⑥

永野博

ものみなにおのづからなる形あり心のすさみとどむべきなり⑤

尾山篤二郎

もの読みて子と対ひあふえにしあり英語をさらふ鉛筆の音③

千代国一

紅葉する丘の小家の閉しあり娘夫婦が住みにけむ家③

小杉放庵

もみぢの落葉あはれなるまで踏まれありあはれなる人の踏みしもあらむ⑤

朝吹磯子

あり

あり

朶に載せ鶉の卵売るとあり内暗き畳に女ねそべれり①

桃色の赤子の着物が干されありおむつのなかにやや清潔に①

桃色を着て水を見る人のあり山のホテルの白き切窓⑫

百年を戦ふところ我等にあり今し大東亜戦の新春迎ふ④

桃の木の子き桃に生毛うぶげあり朝日夕日をうけてかがやく

森かげに大きく曲線カーブせる軌条レールあり莊嚴に見えて踏切りぬ③

森かげに白樺一木立ちてあり我等が家は小さく明るし①

森のなか椎茸のねやはつくられありうす紫の春のきのこあはれ①

森の中ゆくおもひして舟にあり潮来出島に日の闌くところ⑫

もろこしのからの絵を見る思ひあり驢に乗る人の笠の上の雪①

玉蜀黍もろこしの畑に風はひかりありみづみづしくも秋立たんとす

唐黍もろこしをたまたま渡る風のあり昼をひそけみ鳴くきりぎりす②

宮 終 二

初井しづ 枝

與謝野 寛

朝 吹 磯 子

山 下 陸 奥

山 下 陸 奥

山 川 柳 子

前 川 佐 美 雄

松 村 英 一

正 岡 子 規

橋 本 徳 寿

松 岡 貞 総

門のうち濡れたる秋の沙にあり主人の跡と鷺鳥の跡と⑭

與謝野 寛

やうやく警備につきていとまあり枯野踏み遊び故郷思はゆ⑬

上 稻 吉

やうやくにわが身慣れ住む思ひあり雪を知らする文を書きつつ⑮

土 谷 重 朗

屋号にて電話を呼びくる人のあり交換手が苛立ちて対話す

丸 沢 寒 郎

山羊ひとつ引き来て歩む少女あり池につづける青草の上④

堀 内 通 孝

薬草を俵となして積む駅あり飛驒高原に採りし山くさ③

生 方 た つ ゑ

薬罐の茶を口飲みにする男あり庭にてつくれる日蔭涼しく①

久 保 井 信 夫

焼址の街路に若葉息づけるあり不思議にしんしんとしたる寥しさよ④

金 子 不 泣

焼址は炎のにはひ今もありかさと物揺り吹くや春風⑩

尾 山 篤 二 郎

焼あとをならして高き区劃あり一冬過ぎし真日ざしの幅⑤

鹿 兎 島 寿 蔵

焼残りし校舎ただひとつあり唐黍の立つ路を来れば②

堀 内 通 孝

焼原にいのちを保つ樹群あり鳥もかへりこよ市人のため⑤

鹿 兎 島 寿 蔵

あり

あり

やさしいけものの眼の中に見える陽光ひかりあり幸福か苦患かわからぬままに⑥斎藤史

屋敷かげに深く入り組む田圃ありそのおくまりをわれは知らずも②矢部道氣

屋敷街の垣根に凭れて散る花あり熾なりし季節の斯くて追はるる①常見千香夫

疲馬の尻辺に東京港があり紺碧の海に日が没らんとす①小名木綱夫

八手の葉裏にすがる揚羽蝶あげありさみだれ暗くふりまさりつつ①吉野秀雄

夜天よりしんと降るもののあり音の冴ゆるは霜にかあるらし⑱吉井勇

柳の絮はははけて日数ありよし切の声朝よりきこゆ①吉植庄亮

屋根朽ちて庇に長けし芽生えあり峽を入り果てこの部落の神④植松寿樹

やはらかき手を握るごとき若葉ありまぼろしめける光を置きて⑤生方たつゑ

やはらかき若葉となりし藪ありところどころに細くそよぎて①佐藤佐太郎

山間に小学校の校舎ありみち遠くより生徒の通ふ②岡麓

山出でてしばらくのち多賀にありなはいかさまに時移るらん⑳與謝野晶子

山かげに響をたつる流あり瑠璃いろの翡翠かはせみひとつ来啼きて⑬

山形のあがたよりくる人のあり三年味噌を手にたづさへて⑬

山家には必ず柿のみのるありまゆろ檀の紅葉蓼のくれなる⑨

山川にけふゆき遊ぶいとまあり自動車くるまを宿の戸口まで呼ぶ

山峡にかへればひとり暇あり五人の姿見つゝ俤ばむ⑨

山峡にひとすぢあがるけむりありあらしやみたる朝のしづけさ⑥

山かひの美しき村一つありしばらくにして月照れる見ゆ④

山かひのせばまりしところ御堂あり彼岸桜の花けぶり咲く③

山がひの空ひくく飛ぶ螢あり螢のゆくへ見ればかなしも⑩

山峡は秋深くせまき畑あり傾斜をのぼる人見え隠る⑥

山下り多賀の佐野屋に坐してあり潮近く鳴り梅花こぼる⑳

山茱萸の枝もちて食ひつつ来る子あり分教場ひけて遠く帰るか①

あり

斎藤茂吉

斎藤茂吉

尾山篤二郎

桑山武之

中村憲吉

美波早智

斎藤茂吉

河杉初子

斎藤茂吉

高田浪吉

與謝野晶子

加藤洵綾

あり

山ごもりして作りたる大き壺ひとつありやはり英人リーチのもの④

山沢にぬくく乾ける朽木ありそこばくとりし水苔を積む①

山照らす冬の日にぶく天そらにあり相模の山は雪はだらなり②

山寺の盆地を占めて酒幕あり赤きのほりを出してゐしかも②

山中に一屯ひとたむろせる家居あり紅きセーターなどが干されて①

山中の露天明るく湧く湯あり女体原始のしづけさに浴む②

山脈のひくきを越えて径はあり河内大和の国につづくや⑨

山に浴む湯のぬるきにも馴染あり今年また来し上野の国⑩

山に来てなほ聞く人の愛恋あり苔づたふ水を我は見えてゐる⑥

山に來ぬ世のうらめしき故もあり身の哀れなる故も覚えて②④

山に似しふるさとの石置きてあり紅葉の枯葉二三枚散らす①

山にふる豪雨のなかに地震あり気づきたりとおもふその時にやむ①⑦

栗原 潔子

鹿兒島 寿蔵

高田 浪吉

市山 盛雄

磯 幾造

村野 次郎

小国 宗碩

松村 英一

斎藤 史

與謝野 晶子

清水 比庵

斎藤 茂吉